

日本大学芸術学部の場合

目代 清

今回のシンポジュームの基調報告として、日本大学での「舞踊教育」は、洋舞・日舞のうちの「日本舞踊」に重点を置いた報告が求められている。したがって、以下はその趣旨に沿うものだが、日本大学芸術学部での舞踊教育は、「学術と技術」の両面教育を旨として行われて来ている。確認はしていないが、恐らく日本の全大学中での舞踊教育開始の最初のことである点と、また、芸術としての舞踊教育である二つの点に特徴があると思われる。

そこで、若干手間取るが、過去に遡り、現在に至るまでの概略を記し、大方の参考に供したい。

○芸術学部・演劇学科舞踊コース略史

明治22年(1889)日本大学は法律学校として創立。同36年に「日本大学」と改称し、大正10年に法文学部に「美学科」を設置。そして同13年に「文学科文学芸術専攻」に改称。続いて昭和4年には「文学・映画・美術・音楽」の各部門と並んで「演劇(当時、未だ「舞台芸術」の語が熟していなかったところからの「演劇」の語の使用であった。)」が設置された。

さらに昭和12年「芸術学専攻」を「芸術学科」として独立させ、実技専科として「邦楽舞踊科」と「児童学園」を併設した。「舞踊教育」は、この時点から本格的に教育が開始されることになったものである。

内容は、伝統芸術としての「邦舞=日本舞踊」と「邦楽=三味線音楽(長唄が中心)」の教育と、児童の情操と運動機能の開発を目指した「西洋舞踊=ダンス系児童舞踊」を中心とするものであった。(ちなみに前者の担当講師は邦舞は「藤間流宗家派藤間勘十郎」、邦楽は「杵屋勝東治」を代表とするものであった。後者には「柿沢充(児童舞踊教育者)」で担当していた。)

以後、第二次大戦を挟んで芸術教育そのものの苦難の紆余曲折があった。(中略)

昭和24年新学制が施行され「芸術学部」は独立した。が「演劇学科」の正規開設は教員手配等の事情(教員・学生達の戦地からの復員など)で一年遅れた。そしてコース制が採用され「戯曲・演出・演技(国劇・洋劇)・装置・照明」の6コースの「学術と技術」の両面からの教育が実施され、現在は「学理・日舞・洋舞」を加えて8分野のコースが運営されている。

○『日本舞踊コース』修得科目

平成10年現在の「芸術学部」は、8学科=「写真・映画・文芸・美術・放送・演劇・音楽・デザイン」から構成されており、その全学科の科目の総数は964。その内、演劇学科の科目総数は104科目である。これら全科目が「舞台芸術」と無関係ではない。が、とくに「日本舞踊コース」に在籍する学生にとっては、下記科目が必修(ただし教養・外国語・体育を除く)となっており、最終学年では「卒業論文」または「卒業制作(副論文を伴う)」創作舞踊作品の発表があり、修得総単位128以上をもって卒業が認められる。

△芸術共通必修科目(8単位)

「芸術学」	(4単位)
「芸術史学」	(4単位)

△演劇学科共通科目

(下記の内から20単位必修)

「舞台芸術概論」	(4単位)
「日本演劇通史」	(4単位)
「日本舞踊史」	(2単位)
「日本舞踊論」	(2・2単位)
「日本芸能史」	(4単位)
「戯曲論」	(2単位)
「俳優論」	(2単位)
「劇場論」	(2単位)
「舞踊論」	(2単位)
「照明論」	(2単位)

△日本舞踊演習(実技)科目

一年次=週190分×2回+90分×1回の実習がある。ただし、前後期1回づつの実習発表公演を実施。

計(6単位)

二年次=週190分×2回の実習があり計6単位。ただし、前後期1回づつの実習発表公演を実施。

計(4単位)

三年次=週190分×2回の実習があり計6単位。ただし、前後期1回づつの実習発表公演を実施。

計(4単位)

四年次=週190分×2回の実習があり計6単位。ただし、前後期1回づつの実習発表公演を実施。また四年は「論文または卒業制作」として創作舞踊発表公演が持たれ、8単位が認められる。

計(10単位)

国劇制開始当初からの主な指導教員には、飯塚友一郎(故)・内海繁太郎(故)・松本亀松(故)・秋

葉太郎(故)・遠山静雄(故)・三宅藤九郎(故)・鳥居清忠(故)・吉田謙吉(故)・伊藤寿一(故)・板東秀調(故)・藤間勘右衛門(故)・西川扇蔵(前)・永井啓夫(前)・藤間紋寿郎(前)・花柳宗岳(前)・田中恒夫(現)・川野希典(前)・松原剛(現)・目代(現)・丸茂祐佳(現)・藤間勘叟(現)・花柳昌太郎(現)・花柳基(現)・西川箕乃助(現)・石川健次郎(現)・宮尾慈良(現)・堂本正樹(現)・石田幸雄(現)・原一平(現)・藤間周平(現)等がいる。(ちなみに洋舞担当教員には、宮操子(前)・江川明(前)・旗野恵美(現)・加藤みや子(現)・掘登(現)・松沢慶信(現)等がいる。)

なお、日本大学出身の「日本舞踊家」としては、旧制で「五条流二世家元五條詠昇(現)」「泉流初世家元泉徳右衛門(故)」「日本舞踊協会秋田県支部長藤蔭季代恵(現)」を始め多数、新制では「二世叶流二世家元叶一貴(現)」「七々扇流四世家元七々扇花瑞王(現)」「泉流初二家元泉朱緒里(現)」「松風流二世家元松風光陽(現)」などの他、「水木流」「水尾流」「松鶴流」「寿」「山吹流」など、多くの家元を輩出している。なお、新制以降に卒業した現役日本舞踊家の数は、約300人に及び全国で目下活動中である。

○各年次実技の段階的指導内容

＜一年次＞における実技指導は、「伝統的歌舞伎舞踊」作品中から「手ほどき(中級)」の作品(前後期各2作品～3作品)を教材として、前期に「立役」、後期に「女形」を本位に学習。一方、日本舞踊としての創作法の基本を学習し、実験上演する。以上の実習を通じて、各学生個人が幼少時から身につけた市井各舞踊流派での、技法上の「凹凸の均一化・癖直し・役の徹底表現・五段表現の別」などを徹底教育する。ほかに上演等を通じて、「衣裳学習・着付け学習・化粧技法・道具の扱い法」など、舞台上演に関わる全てを、自身の実体験により修得することに重点がある。

＜二年次＞における実技指導は「御祝儀・歳旦舞踊」作品＝素踊り(無装飾)の表現と、「歌舞伎舞踊」作品のごとき装飾舞踊作品の素化＝無装飾舞踊の表現体得。さらに、「舞踊劇」による表現を通じて「役上の表現技法」の修得に重点を置いて教育。またこの学年では、上級生による創作舞踊作品への参加・助演を通じて、「無歌詞」でのリズム本位の舞踊表現を学習する。なお、日本化粧＝水化粧に対する「素踊り」のための「ファンデーション化粧」と、創作舞踊のための衣裳・結髪等の創意工夫に参加し、以後の学習に備える。

＜三年次＞における実技指導は、これまでの「創作舞踊」に関する学習を踏まえ、「主題・音楽・扮装・照明・装置」など、全てを自身の力量で制作し、劇場で上演する。ただし、前期には主に

邦楽関連音楽(比較的短い曲で、歌詞を有する音楽)の使用を、後期には洋楽(種類は問わない)の使用を薦めて作品づくりを行う。なお現実の舞台での上演に際しては、照明・装置・音響の各コースの実習と提携する。そこでこれを「総合実習」と称して、位置付けを別にして6単位を与える。

＜四年次＞では「卒業制作」としての「創作舞踊」作品に中心が置かれる。卒業見込者は「主題・振付・音楽・扮装」などの全てを自身で選定し、前期にその作品を試演。指導担当教員の他、日本舞踊関連の全教員の予備審査を受ける。(その際、所定の点数に達しない場合は、欠点の改善指導を受け、後期公演に向けて再制作。)後期最終公演で審査を受けて合格の場合は、「副論文」の執筆に入り、所定の期日までに提出。その「副論文」の審査・面接を受け、「公演の成果」と合わせて採点する。

○『日本舞踊』の大学教育

現行の社団法人「日本舞踊協会」には、全国約6000名に及ぶ日本舞踊家が会員として所属している。流派数は110余を数える。ということは「家元・宗家」を名乗る者がそれだけ存在し、舞踊家の頂点に立ち、近世以来の芸の伝承と教育とを果たして来ている。この家元制度に基づく流派の組織が施行する伝統的・組織的・間接的な経済上の保証制度の内にあって、所属の流派に反発し脱退しないかぎり、舞踊家としての生活は終生安泰なのである。そうした市井一般での既存の職業組織のありようを無視し、公的立場にある「学校教育制度」に『日本舞踊』を採り入れ、学術上の教育面に限定する場合はまだしも、舞踊家そのものを育成することは、種々の支障を伴う。かりに学校教育という公的な立場を楯にして、敢えて民間舞踊教育同等の教育を実施すれば、それは、新規に日本舞踊の一流派を樹立するのに等しく、民間舞踊流派から猛反発を受ける結果を招くのは確実である。したがって、学校教育に『日本舞踊』を採用することは、目標を慎重に実施されなければならない。そこで日本大学・芸術学部では、民間『日本舞踊』のありようと重複させることなく、しかも、その教育の不足を補う形式を採用し、むしろ教育成果を民間に還元するよう教育指針をたてて実施してきている。それがすなわち日本舞踊の「学術面での教育」と「創作の基礎的教育」なのである。

こうした教育指針に基づくシステムによる多年の成果は、これまでの報告でも察知されるが現実には舞踊家のみならず、「俳優」や「台本・演出・監督・照明・装置・音響・衣裳・小道具・後見」「舞踊音楽」など、あらゆるポジションで専門家を育成・輩出している。(以上)